

2013 国際教養科 NEWS 7月

国際教養科特別授業① 講演会(7/11)

7/11 (木) に、ペシャワール会事務局長の福元満治先生を講師として国際教養科1～3年生全員(121名)を対象にした講演会を行いました。「アフガニスタンに命の水を 国際協力の28年」という演題でご講演いただき、アフガニスタンで日本人として活躍されている中村哲医師を中心とするペシャワール会の28年間の現地での活動についてお聴きしました。中村哲医師とペシャワール会の活動については、英語の教科書で「国際貢献」、「医療活動」の題材として本校でも授業で英文を読んだことがあったり、講演会の事前に、現地の活動についてのDVDを観て、興味や関心も持った生徒も多く、生徒・教師一同、この講演会をとっても楽しみにしていました。

講演会は、大変好評で、ご講演後は生徒から質問が尽きることなく多く出され、また生徒の感想文からもこの講演会で深く考え、学んだ様子が見えられました。

- 1 目的** アフガン戦争を経て、アメリカ同時多発テロ事件、アルカイダ組織、部族タリバン、日本人拉致事件などの関連で、世界的に注目を浴びてきたアフガニスタンで、日本人として活躍されている中村哲医師を中心とするペシャワール会の28年間の現地での活動(医療活動、井戸、灌漑用水路建設事業、モスク・マドラサの建設など)についてお話をお聴きすることを通して、異文化理解の重要性や国際協力のあり方、差別や貧困の問題について深く考える。
- 2 実施日時** 7月11日(木) 13:00～14:55(格技室にて)
- 3 内容** 90分(講演) + 25分(質疑応答、生徒代表お礼の言葉)
- 4 参加生徒** 国際教養科1～3年生全員(121名)
- 5 講師** 福元 満治先生 1948年 鹿児島市生まれ
ペシャワール会事務局長、図書出版石風社代表、西南学院大学非常勤講師
- 6 演題** 「アフガニスタンに命の水を 国際協力の28年」
- 7 事前指導** ペシャワール会の活動を紹介したDVD(約24分)を借用。事前に各クラスで視聴する。事前に資料を配布して読ませ、講師の先生への質問を事前に送付
- 8 事後指導** 感想文の提出



・今回の講演を聴いて、まずはじめにアフガニスタンという国に対する見方が変わりました。最初は確かに福元先生が最初におっしゃっていたように自爆テロをやる人がたくさんいて、荒れた国だというイメージが私にあったのですが、国民の80%以上が農民の農業国で、食糧自給率が90%を超える豊かな国だったと聴いて、正直、驚きました。(1年)

・私は、今回の講演会を通して、自分は世界で今起こっている出来事について、一つの視点からしか見ていないという

こと、そしてその見方はメディアから受け取るわずかな情報に偏っているということを強く感じました。私が驚いたことは、「大干ばつによって、多くの命が失われ、何百万人の人が難民になった事実は伝えられず、9.11 事件以来のアメリカによるアフガニスタン空爆や世界遺産が壊されたことばかりが大々的に報道され、世界が大きく反応し、私も含めて多くの人がテロが横行する極めて危険な国としか見ていなかった」ということです。(2年)

・今回の講演で聴いた中で、井戸掘りや用水路の建設に現地の人々に給料を支払って、雇っているのは、本当に素晴らしいことだと思いました。地元の人に参加することによって、自立することができるばかりでなく、失業対策にもなるからです。(3年)

・事前に観た DVD の中で、現地の人同士が今日、そして明日を生きるか死ぬかのために、水を手に入れようと激しく争っている場面がありましたが、現地では水の確保がどれだけ切実で、大変であるのか、しかしその一方で蛇口をひねっただけできれいな水を手に入れることができる私たちはどうあるべきなのかということを深く考えさせられました。(1年)

・福元先生が紹介して下さった中村医師の言葉に、「みんなの行くところには誰かがいるから、自分たちが行く必要はない。誰も行かない所に行くから価値があるんだ」というのがありました。これは私たちの生活にも大切なことだと思いました。みんながやらないことを進んでやれるような人間になることはすごく難しいことだが、本当に必要があると思いました。(2年)

・中村医師は、人の医療だけでなく、「大地の手術をしている」という言葉が胸にしみ、「目標は低くてもいいが深く」という言葉が私を元気づけてくれました。福元先生のお陰で、アフガンの本当の姿がわかり、当たり前だと思っていた自分が恵まれていることなどを再認識することができました。、将来を見直すきっかけにもなり、自分で自分に限界をつくっていたことにも気づくことができました。(3年)



・私は特に、水たまりの泥水を飲んでいるこどもの写真にショックを受けました。今の私たちには考えられない光景でした。そして、清潔な水がないから亡くなる人がいることに改めて驚きを感じました。私たちが無駄にしているペットボトル1本分の水でさえ捨てなければ、誰かの命を助けることができると考えると水に対する考え方が変わり、改めて節水に取り組もうと思いました。(1年)

・「現地の人たちが本当に必要と感じていることをやるべきだ」というお話がありましたが、私が1年次に参加した JICA の講演会で青年海外協力隊の方も同じことをおっしゃっていました。「やってあげる」という目線ではなく、「一緒にやる」という目線が大事であると改めて思いました。(2年)

・福元先生が、「相手の文化を理解することは、相手の文化を尊重することだ」とおっしゃるのを聴いて、理解しようとするのでなく、尊重すれば視野が広がり、異文化;相手の文化について、もっと深く、もっとしっかりと理解できるのかなと思いました。(3年)

・中村さんは医師なのに、なぜ井戸を掘ったり、用水路を造ったりするのだろうかと思っていましたが、お話を聴いて、納得しました。現地の医療活動の中で、「薬では、飢えも渴きも治せない。薬以前に、まず清潔な水が必要だ。きれいな水さえあれば何万人もの人を救える」ということを知ってから、独学で用水路の造り方を学び、実際に行動を起こし、ついに1600本の井戸と合計100km以上の用水路を造った中村医師の決断力と実行力には本当に感動しました。そして、写真を比較して見せていただいたところ、昔は、荒涼



とした砂漠だった大地が、あそこまで緑が再生するのかと自然の力の強さに驚きました。(1年)

・今回、印象に残ったのは、文化や伝統は基本的に優越をはかるものではなくて、先進国が優れているということはないというお話です。その国が誇るものや受け継いでいるものを互いに尊重し、大事にし合うことが必要だと思いました。そのために、知らないことや噂に惑わされることはとても怖いことだと思いました。知らないことには何もわからないし、相手を傷つけたことにも気づきません。他の国の人と触れ合う時は無知ではいけないし、対等な立場でいることが大事だと思いました。(2年)

・アフガニスタンのために、用水路を造ったり、井戸を掘ったり、しかしその作業を機械に頼って行うのではなく、支援活動が終わっても、現地の方が自分たちの力で管理・維持できるようにあえて独学で学んだ日本の江戸時代の治水技術の手法を使って、時間をかけて未来のことも見据えて活動している中村医師は本当にすごい人だと思いました。(3年)



・特に印象深かったことは、「善意だけではうまくいかない」ということです。特に、先進国の人々において、発展途上国の人々に対して、無意識の優越感を持っていると言われて、ハットしました。「良い」と思って、ただ行動を起こしても、その土地にある文化や伝統を理解しなければ、むしろ「良くない」ことになる。異文化を理解することは本当に難しいことだと思うが、相手の文化を理解し、尊重することが成功するための一番の近道であると思います。この講演は、今後の私の

の人生に大きく影響するような気がします。本当に素晴らしく、(私にとって)ためになり、こんなに刺激を受けた講演は初めてでした。ありがとうございました。(3年)

・私は大学で建築を学び、発展途上国などで、家や学校のない人々のために、役に立ちたいと思っていますが、(今日の講演を聴いて)建築のことだけでなく、他国の文化も学ぶ必要があると思いました。偏見を持たずに、相手の文化と必要としていることをたくさん学んでいきたいです。(3年)